



## ちょっとそこまで ～お散歩日和 (名言編)～



# 平等を自然の法則とするのは… ヴォルヴナルグ

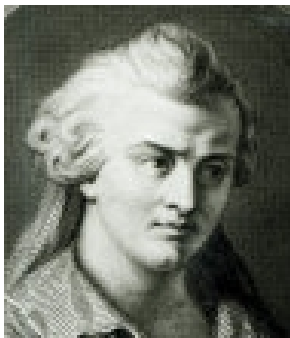


平等を自然の法則とするのは正しくない。  
自然は1つとして平等なものを作らなかった。  
自然の至上の法則は従属と依存である。 …… ヴォルヴナルグ



ヴォルヴナルグという人はほとんど有名ではありませんが、ヴォルテールとの友情は有名です。また、パスカルやラ・ロシュフコーに続いた思想家であり、彼の後にルソーが影響を受けているという位置付けで理解してもらえればと思います。

彼の生い立ちや境遇を簡単に説明すると、何となく彼が考えそうなことが見えてくるように思います。



彼は、南仏プロヴァンスの貧しい貴族の家に生まれます。生来病弱でしたが18歳で軍隊に入ります。ところが、そこで凍傷にかかり退役します。その後、外交官を希望しますが、今度は天然痘にかかって断念します。それ以降、病苦と貧窮のうちに文学の道を志すも、評価を受けることもなく31歳で亡くなります。ただ、後世、彼の著作からのエッセンスをまとめて出版した「省察と箴言」が高い評価を得ることになります。ちなみに、練馬区の図書館には「不遇なる一天才の手記」（岩波文庫版）のみが所蔵されています。

前段はこれくらいにして、冒頭の言葉を聞いてすぐに思い出すのが福沢諭吉の「天は人の上に人を造らず。人の下に人を造らず。」でしょう。ただ、ここで触れておきますが、これは福沢諭吉自身の言葉ではありません。この言葉の後に続く言葉が省略されています。正しくは、

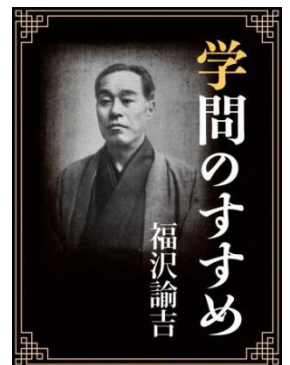
「天は人の上に人を造らず、人の下に人を造らずと云えり。」

となっています。これを現代語訳すれば「～とされていますよね。」となります。さらに、彼は次のように言っています。

されども今広くこの人間世界を見渡すに、かしこき人あり、おろかな人あり、貧しきもあり、富めるもあり、貴人もあり、下人もありて、その有様雲と泥との相違あるに似たるは何ぞや。

つまり、いくら生まれながらに平等だと言っても現実にはそうではない、と前言を全否定しているのです。耳に心地良い言葉の部分だけが独り歩きしている典型です。

とは言え、福沢諭吉が主張したかったのは学問の奨励です。彼は言います。人間が、生まれつきは平等なのに、そこに差が出てくるのは、学問したかどうかの差なのだ。彼は決して人間の平等を尊んだわけではなく、生まれの平等にも関わらず学問によって差が出てくることを真剣に考えようと訴えている発言なのです。



とすれば、先のヴォルヴナルグの言葉と本質的な相違はないということになります。その理由の1つに挙げられるのが、ヴォルヴナルグに「身分の不平等は、天分や勇気の不平等から生まれた。」という言葉がある点です。

ただし、ここで誤解を恐れずに付け加えるならば、同じ学問をしても、どこまで伸びるかには当然個

人差があるということでしょう。それを考えてみても、彼の言うように「天分」、つまり、生まれつきの才能というものは、平等に与えられているわけではなさそうです。

ここで考えなければいけないのが、才能とは何かということです。才能や資質といった概念は、一見分かりやすいようですが、実はあやふやなものです。辞書を引いてみました。

- ・物事を理解して処理する、頭の働きと能力。（新明解国語辞典）
- ・物事を巧みになしうる生まれつきの能力。才知の働き。（goo 国語辞典）
- ・才知と能力。ある個人の一定の素質、または訓練によって得られた能力。（広辞苑）

それぞれの辞書で微妙に表現が違っているのに気付きます。要するに、才能には、

- ・生まれつきの先天的な素質・能力
- ・訓練によって開花する後天的な能力

の2つの面があって、どちらを強調して捉えるかによって才能に対する解釈が変わってくるということになります。その意味で、ヴォルヴナルグは先天的な素質だと考え、福沢諭吉は後天的な能力だと考えていたことになります。

映画「ビリギャル」で注目されるようになった坪田信貴氏の「才能の正体」を読みますと、彼の見解は、才能とは先天的な力を正しく導き、努力を開花させた結果ということで、両者のいいとこ取りということになります。



いずれにしても、後天的に精進を重ねることで才能は磨かれるという、これまで言い古されたことの繰り返しに過ぎませんが、読者を前向きな気持ちにさせてくれる書です。それを象徴するフレーズとして「やればできるではなく、やれば伸びる」「才能の正体は洞察力」「技に留まらず、術を体得する」「フィードバックは客観的事実のみ言う」などが並んでいて、その土台には各自の天賦の才が眠っているという考え方です。いかにも教育関係者が好みそうな主張です。



ただ、ここで皮肉を込めて言いますと、「才能があった」と分かるのは、それを伸ばした後だということです。伸ばしたことのない才能の有無や善し悪しなどは、身長や体重といった計量可能なものでない限り、前もって分かるものではありません。これを心理学用語で「後知恵（あとぢえ）バイアス」と言います。

「やっぱり思った通りだ」「だからそう言ったじゃないか」「いつか問題が起きると思ってたよ」という言葉がそれに当たります。

先のワールドカップ予選で負けが続いたとき、マスコミや世間はすぐに「森保監督はダメだ」と評価し、交代論まで出ました。しかし一方で、結果をとともない始めると、途端に「彼は名将だ」と持ち上げ始めました。これが、典型的な後知恵バイアスです。

医師に患者の記録を見せて、どんな病気かを問う実験でも同様のことが起きます。それによると、事前に患者の正しい診断名（結果）を知らせたグループと、知らせないグループとでは、知らせたグループの方が正しい診断名を多く答えたというのです。

つまりは才能があるかどうかを問うことに、それほど意味はないということです。これは職業的な適性にも当てはまります。要は自分の持ち前を、自分の納得のいく形で精一杯に伸ばすしかないので。自己責任の範疇です。

と同時に、こうしたことから言える教訓は、結果を重視した判断を行うことの危険性ということになります。最後に、ゴッホの書簡集から。



「何か真剣なもの。何か新しいもの。魂のあるものを作りたい。前進。前進。」

(終)